

い、歌にするものとのみ思っていたのに、世の中も社会も人間も何もかもすっかり変わった。

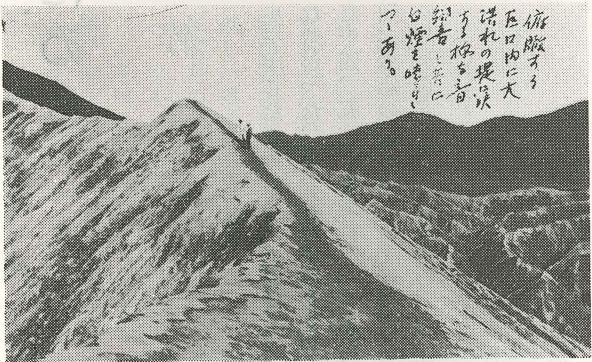
併しその激しい変遷の中にあつて私共の間に只一つ変らないものがある。鈴木で同じ釜の飯を食ったという誇りと、その先輩後輩の友情である。思いは同じで十年前、その誇りと友情が絆となり、辰巳会が結成された。そしてありし日の本家を偲び愛惜と追慕に和氣と稚氣、愛すべき雰囲気の裡会は健やかに成長している。せめて鈴木縁にちながる諸兄よ、お互いに五十年前のあのボンさん時代に返って一杯の酒に現在を忘れ共に昔を語りあかそうではないか。働らいて食って金ためて、只それのみが人生でもあるまい、時には童心に返り、過去の夢を追うのも亦万更ではない、金はもって死ねないが思い出の夢は冥途までもってゆける、お互いにもう先は知れてるじゃないか。先輩、後輩はみんな兄のの来るのを待っている。そこには社長も重役もない、地位も階級もない富める人も貧しい者も皆一様に只ボンさん時代の先輩後輩として、兄貴分弟分として五十年の昔に返り枯木に花を咲かせている。そしてそこには一台の素晴らしいタイムマシンが据付けられている。このタイムマシンに座る事の出来るのは会員だけ、

試みにこのマシンに座ってハンドルを未来に廻すと、会員は皆極楽の素晴らしい楽園に案内される、そこはお家さんを始め、柳田、金子、西川さんらの大先達が、大勢の店員達と共に楽しく幸せに談笑している。又、ハンドルを過去に廻すと、ありし日の鈴木時代のボンさん姿に返り、夢

## スラバヤ懐古

宇津木亥一

スズキ、スラバヤは或る時代、か



△ スラバヤのブルモ火山（海拔八千尺の最高峰）

多かりし茶汲み時代が現われ、現在老骨の先輩の顔が若い紳士にみえてくる。この若返りのタイムマシンに兄等を一度座らせてみたい。入店以来半世紀諸兄よ今何処にいる、大正八年即ち五十年前入店当時の記念写真をここに載せて兄等から元気な消息を待つ事にする。

なり長期間、大鈴木の素晴らしい宝庫であった。ジャバ全島年間製産二百数十万屯の砂糖買付高の首位を占め、内地需要向け輸出のほかに欧州アフリカ、近東、印度、中国、東南アジア各地へ輸出し、莫大な利益を獲得していた。

三井、三菱、有馬、千田等の邦人商社、また古くからの外人商社を凌いで、買付王となつたのは実に驚歎に値するものであり、濠洲に於ける羊毛買付競争勝利とその様相を等しくする。

当時の寺崎栄一郎支店長と大久保弥十郎支店長とは、安藤珍成バタバヤ支店長と共に矍鑠として御健在である。慶賀に堪えない。

私は関東大震災の前年、即ち大正十一年夏から大正天皇崩御の月、同十五年十二月迄（二十四才夏から二十八才秋まで）スラバヤ勤務をした。一九六九年秋の現在、その友人、先輩の多数が亡くなって非常に寂しい。また保存資料は大東亜で全部灰燼に帰したが、微かな記憶を辿って思い出を綴ります。

大正末期年間数億ギルダーに昇る取扱商を有したスラバヤ支店の大動脈は、三十五、六才乃至二十四、五才の潑刺たる若い社員で運営されていた。川島浦次郎、藤沢次郎、藤原恒三郎、戸倉薫三の年長組と、川村節、柴田巖、山岡昇、伊東治太郎、福井貫一、竜山務、中西兎喜治、岡邦彦、小田原政清、竹下英一ならびに私などのチョンガー組とであつた。

寺崎さんは後半、紐育支店長へ栄転されたので、大久保さんがシンガポールから着任された。昭和二年の終局には、本店から水野部長が赴任されて、其の結末を着けるのに大奮闘されたのでした。

カンボン、グーベンにあつた杜宅は、スラバヤ最大の邸宅であつた。石造二階建の豪華建築で、裏を流れるスラバヤ川が常に静かに水を湛

え、亭々たる椰子の並木を映していた。爽かなグリーンで囲まれたテニスコートが一面あり、退社して日没まで日々流汗淋漓のレクリエーションの場であつた。私どもは此処に住むことに一種のプライドさえ持った。

ジャバは雨季と乾季とが截然としていて、四月イースター休日が明け乾燥季に入ると会社は俄然、繁忙を極めた。

砂糖積出港は、スラバヤ、スマラン、プロポリンゴ、パスルアン、チラチャップ等の数力港であつたが、各所のフィルム（倉庫会社）が集荷入庫、保管、発送まで確実整然と管理していた。我が南洋倉庫も活躍していた。此等に関連する銀行、船会社、保険、品質検定等々の事務処理に徹夜も厭わず忙殺された。而して歳末の降誕祭が来ると、やっと一息ついた。十一、二月頃になると交替で賜婦帰朝し、新妻を迎えて帰任するものもあつた。

日本の銀行は、正金、台銀、三井であつたが、台銀とは常に親戚つき合ひであつた。土、日には庭球の親善試合をよくした。その他の邦人商社とも時々招待し合つて親密にした。無線の発達しない頃であり、本社、ロンドン、紐育、孟買、カルカッタ、アレクサンドリア、シンガポ

ール、香港、上海等との交通は有線一本であつた。今日では普通であるが、オフィスでも、社宅でも電信局直結の電話で着、発信をした。トラストの買付は寸秒を争つた。私どもは此の直通電話で屢々優位を保ち得たと思う。

ショッキングな電報の第一は、関東大震災に関する本社電報であつた。その次は摂政官狙撃事件の新聞電報であつた。

本社からは常に日本酒、海苔、雲丹、レコード等を好便に托された。邦人コック調理の和食の膳に、四季とりどりの豊富で美味なマンゴー、マンゴステン、パイアヤ、バナナの果物が山積され、この点については郷愁は皆無であつた。販売の目的でサクラ麦酒は欠かさず到着していた。しかし外国麦酒との競争は容易でなかつた。

交通は主として自動車、馬車であつた。会社にも二、三台あつた。市中には電車、汽車が走っていたが利用するのは稀であつた。郊外へはグーベン駅から狭軌各駅停車の汽車で行つた。遠距離へは急行であるが夜行は無かつた。

邦人間には専ら庭球が大流行であつた。在留民合同の大会、トーナメントも毎年行われた。また馬術が流行した。またゴルフも盛んになつて

居た。大久保さんが、チャンピオンシップを握つて居られた。

わが社宅には芳川箭之助さんから寄贈されたスカルが一隻あつた。夕方になると、裏の川に浮べて、鏡面の如き水を日没まで漕いだが、一度や二度転覆して泳いだ者は数知れない。イースターやクリスマス休日には、よく避暑旅行を楽しんだ。東部の大活火山トサリへは数回行った。

サンド・シーを馬で飛ばせ、プロボの火口へ首を出して身震いした。恐さと寒さである。ソングリツチ温泉、克蘭ボック山荘へも何回となく行った。特に甘味な馬鈴薯と、新鮮な牛乳を満喫した。バンドンは西部の大都市で気候も良く温泉もあり、また西本願寺の大谷光瑞師の大農園があつた。シトラネル香料の原

草が何哩と続く農園を視察し、南海岸までドライブした。ジャバ第一のグロボトルム跡は、ジョクジャカルタ東南郊にあり、その全貌を見尽すのには数時間では不足する。私どもは単に案内人の特に指摘する彫刻の絵巻の帆船の部分とか戦闘の部分とかを撮つて帰つた。ジョクジャ・ソローの王城の遺跡、手描の更紗の工程などは詳しく見学した。宇野円空文博（人文学）が来訪された際は、時間の許す限り郊外の遺跡をも案内して、土俗の風習について却つて細

々と教えを受けた。現地雇用の土人支那人、半黒等は二十数名であつたが、和蘭の政策に馴れて従順で、温和であつた。ただ地方にはキャンガン・クイ、ホートン等の華僑の大財閥が巾をきかして居た。その実力は恐るべきもので、色々の話を聞いた。今日の独立政権は彼等の弾圧に奔走したが、経済の底流には隠すべからざる力が消えて居ない。

只今嵯峨の奥に御健在の多賀不二夫孟買支店長は、その途上二回程お越しになつた。また香港の水谷武夫さんも私共以前スラバヤに居られた。今は故人となられた芳川箭之助、西川玉之助、谷治之助、上村政光、灰本音次の諸大家は期間の長短は問わず、滞在された。

昭和に入つてから私共は毎年一回以上は鈴木ジャバ会を開催した。多い時は十数名の集りがあつて歓談を楽しんだ。今秋頃の只今では思つても覚束ない話である。彼の時は誰々と、行を伴にしたと記憶を呼び戻すだけで、その人々の殆んどは亡く、夢は約半世紀の彼方の地平線上に消え去らんとしつつある。清滝川の紅葉は毎秋毎秋美しく錦を飾つて居るけれど、夢は再現しない。惜しいことです。

只今惟有西江月  
曾照吳王宮裏人